

東京 2020 オリンピック陸上競技チームドクターレポート Track & Fields (東京)

鎌田浩史¹⁾²⁾ 田原圭太郎¹⁾³⁾

1) 公益財団法人日本陸上競技連盟 医事委員会 2) 筑波大学 医学医療系 整形外科

3) 多摩総合医療センター 整形外科

【はじめに】

第32回オリンピック競技大会(2020/東京)(正式な略称=東京2020オリンピック)は世界中を震撼させているCOVID-19感染禍の中、何とか無事に開催することができた。携わられた多くの関係者の方々のご努力により大会が実現したことに、改めて敬意を表します。感染拡大、1年延期、無観客開催など、これまでは類を見ない大会となったことは言うまでもない。折しもオリンピック期間においては日本国内では第5波にあたる感染再拡大の傾向があり、大会開催、進行など、様々な意見が賛否両論ある中で実施された。今回、東京2020オリンピック陸上競技のうち、東京で開催されたTrack & Fields種目にチームドクターとして帯同し、選手のメディカルサポートに従事したので、報告する。

【大会の概要】

東京2020オリンピックは2021年7月23日から2021年8月8日に開催され、陸上競技のうちTrack & Fieldsは2021年7月30日から8月8日まで10日間、東京の国立競技場で行われた。(競歩、マラソンは札幌開催)

選手団は選手66名(会期中に1名変更)(男子44名、女子22名)、監督・コーチ・スタッフ46名の総勢111名であった。出場選手総数で見ると、リオ52名、ロンドン46名、北京40名、アテネ39名と比較して多くの選手が出場でき、自国開催に向けた選手の努力と、選手強化の賜物ではないかと思われた。

オフィシャルなメディカルサポートとしては医師2名(鎌田/札幌:鳥居)とトレーナー3名(東京2名/札幌1名)が帯同した。さらに、東京においては医師1名(田原)とトレーナー2名、札幌にお

いてはトレーナー1名が村外メンバーとして対応した。

【環境・会場・選手村】

本大会は東京での自国開催であったため、環境に関しては特記すべき事項はないが、大会期間中は相



図1: サブトラック室内待機所



図2: レース後 ice bath にてクーリングする選手



図3：選手村内居室、ベッド



図5：選手村内ポリクリニック



図4：選手村内 食事



図6：超音波診断器によるスクリーニング

変わらずの猛暑であり、暑熱対策には十分気を付けた。国立競技場サブトラックには屋根付きでエアコンの効いている（効きは悪かったものの）待機所があり、そこに陣を構えた（図1）。氷や水分の配給は十分であり、また、クールダウンできる ice bath（図2）も用意されており、環境には十分対策がとれていた。

サブトラックから競技場までの距離が長いことと、感染対策のためやむを得ないものの COVID-19 感染のための zoning によりアクセスが不自由だったことが難点であった。無観客であったことは大変残念ではあったが、関係者、チームメンバーは競技場内の決まったエリアでの観戦は可能であり、必要に応じて競技場内での選手の動きを確認することができた。

選手村は居室（図3）、食事（図4）、ポリクリニック（図5）体制など充実していた。これまでの国際大会では選手もスタッフも食事や環境の面で頭を悩ますことも多かったが、本大会では環境面での問題

はほぼなかった。

【大会でのサポート】

本大会では大会期間中に肉ばなれを受傷した選手の対応を行った。持参した超音波診断器を使用しつつ（図6）その程度を確認し、症状に合わせてトレーナーとともにケアするとともに、ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）練習時に固定用のバンドを JISS クリニックより入手し、試合までにできる限りの調整を行った。何とか試合には出場することはできたものの、自分のパフォーマンスを発揮することができず悔しい思いをした。試合後にはポリクリニックにて画像検査を行い、大会後の調整についてアドバイスを行った。

また、本大会までに外傷・障害があった選手数人に関しては、まずは試合に出ることを目標として調整のサポートを行った。しかしながら試合までの練



図7：トレーナールームでのケア



図8：メディカルサポートミーティング

習や当日のコンディショニングはベストとは言えず、最大限の力を出すことができなかった。

本大会では、選手はギリギリまで村外やHPSCで調整をしたのちに、試合に合わせて選手村に入ってくる体制であった。そのため、選手のコンディションを一元的に直接確認することが難しく、サポート内容にも苦勞した。大会前のコンディションチェックシートなどを活用し、大会前練習の場であるHPSCの田原ドクターと村上トレーナー、日中に選手村で対応した砂川トレーナーとも連携を図りつつ、できる限り多くの情報を集めながらの対応であった(図7、8)。

【本大会ならではのサポート】

これまでの大会にない、メディカルサポートの難しい点がいくつか挙げられた。

#1 バブル管理

今回の大会はこれまでに経験したことのない「バブル方式」にて大会が開催された。「バブル方式」とは、開催会場、宿舍、練習会場を大きな泡としてくるみ、選手、コーチ、関係者を外部と隔離し接触を遮断するものである。選手村に入る前に健康アプリであるOCHAを登録することが義務付けられておりPCR検査を実施し、感染がないことを前提にバブル内に入ると、それ以降は原則バブルから移動できないような仕組みとなっていた。選手村においてはOCHA登録と、PCR検査が毎日行われ、対策本部による厳格な管理と行動制限が課せられていた。我々もいったん選手村に入ってから外部に出ることはできず、バブルの中のみで活動を行った。選手村宿泊でない村外対応トレーナーは、近隣のホテルに滞在

しながら、外部との接触がない同じバブル管理で制限されていた。徹底した感染対策が施されていたため、感染に対する脅威は幸いになかった。

#2 COVID-19 感染

今回の大会ではCOVID-19感染に関わる対応がいくつかあった。一つは移動のために利用した公共交通機関の中で発生したCOVID-19感染事例である。選手自体ではなく、たまたま同乗した交通機関の中に陽性者が出てしまったものである。席が離れていたこと、マスクをしっかりと着用していたこともあり、濃厚接触者とならず厳重な経過観察のみで事なきを得た。また、一つは、選手の関係者に陽性者が出た事例である。選手に感染兆候はなかったものの周囲への拡大を念頭に置き、選手は他の選手と行動を共にしないことが求められた。こちらに関しても幸いに感染は認めずレースにも出場することができ、胸をなでおろした。これら一連のCOVID-19感染対策に関しては、Tokyo 2020 Playbooksのマニュアルに準じるとともに、JOC日本代表選手団の「新型コロナウイルス対策責任者：CLO」である土肥美智子先生の多大なるご協力のもと、連日確認を取りつつ対応した。

#3 自国開催

本大会は自国開催であること自体が特殊な流れであった。大会直前ギリギリまでHPSCにおいて調整が可能であったため多くの選手がHPSCを利用していた。(基本的にHPSCもバブルの一つであり、HPSC対応医師、トレーナーの行動は制限されていた。)これまでの大会では、海外遠征の際には、日本出発以後は選手団としてまとまって行動していたため、選手の健康管理については一元管理しフォローする

ことができているが、今回は出場ギリギリまで選手村に入村することがなく、そのため、選手の健康管理を十分に把握しきれない可能性が考えられた。事前に再三打ち合わせを行っていたため、幸いにも選手個人のトレーナーやパーソナルの方々との連携をとることができ、大きな miscommunication はなかった。HPSC での活動の詳細は次に示す。

【ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）におけるサポート】田原担当

HPSC はナショナルトレーニングセンター（NTC）や国立スポーツ科学センター（JISS）などからなる施設で、東京 2020 オリンピックにおけるバブル内の施設として他競技団体も含め多くの選手やスタッフが利用していた。

陸上の日本代表選手の多くが、HPSC 内の施設に宿泊しながら、同施設内の陸上トレーニング場で調整し、競技 2 日前に選手村に入って最終調整を行い、競技当日を迎えていた。

HPSC でのメディカルサポートは陸連のメディカルスタッフとして 7 月 25 日より最終日の 8 月 8 日までドクター 1 名・トレーナー 1 名が JISS へ宿泊し、日中は HPSC 内の陸上トレーニング場やアスリートビレッジなどに常駐して選手サポートを行った。通常、日中は陸上トレーニング場に行き、有事の対応やフォローが必要な選手のチェックやケアを行っていた。

また、陸上トレーニング場やアスリートビレッジ内ではパーソナルトレーナーが選手サポートを行うことも許可されていた。そのため、選手によってはパーソナルトレーナーのみに診てもらい、代表のドクターやトレーナーの診察を受けない選手もいたことから、コンディションの状態を代表のメディカルチームが知らないということを守るために、パーソナルトレーナーの方々へ選手のコンディションの情報を選手団のメディカルチームへ共有して頂くような体制を整えた。

CPVID-19 の対策として、本大会はバブル形式で行われていたが、HPSC の施設は国立競技場や選手村とともにバブル内になっており、施設を利用する選手・スタッフ全員が CPVID-19 の検査を毎日受ける必要があった。HPSC 内で選手サポートを行うパーソナルトレーナーも同様に検査を受ける必要があった。トレーナールームは陸上トレーニング場やアスリートビレッジ内に設置したが、三密の回避、消毒、マスク着用などの CPVID-19 対策を行いながら運営

した。

HPSC におけるメディカルサポートの実際としては、大会前から JISS クリニックで治療を行ってきた腓腹筋肉ばなれ、ハムストリング肉ばなれ、菱形筋肉ばなれ、鷲足炎、アキレス腱炎、膝関節包（＋後外側支持機構）損傷、などの選手の最終調整における状態の確認などのサポートを行った。また、大会期間中に生じた傷害に対して装具の処方や、咳で夜眠れないなどの内科的な相談もあり、海外での国際試合の際と同様に陸連で用意した簡単な処方薬や処置に必要な物品の用意はしていたが、用意していた薬での改善に乏しい場合や症状によっては JISS クリニックでの診察を依頼した。有事の際は HPSC 内にある JISS クリニックへ受診をすることが可能であり、今回は自国開催であったので JISS クリニックでの診療などのバックアップがあり、大変心強いサポート体制であった。

メディカルチームが離れて活動をしなければならない状況であったため、いずれの症例も選手団のメディカルスタッフと情報を共有しその対応を行い、チームとして選手サポートを心掛けた。

【ドーピングコントロール】

本大会においてもドーピング検査が行われた。まず大会前に競技会前検査が選手村にて行われた。2 名の選手が該当し、選手村に設置されたドーピングコントロールステーション（DCS）にて実施された。日本国内の大会ではあるものの、大きな国際大会のため基本的には日本人以外の DCO（Doping Control Officer）が担当することが多かった。今回はタブレットを用いた公式記録登録であり、慣れない選手に対してサポートすることができた。（個人的には、慣れない DCO や選手が多いこともあり、タブレット方式は時間がかかるとともに、情報管理もひと手間あり、紙ベースの方がスムーズな印象ではあった。）血液検査も含まれていたが、国内での血液検査が近年多くなったこともあり、選手も混乱せずに対応できていた。大会期間中は国立競技場で競技会検査が行われた。国立競技場の DCS は十分な広さもあり、ブースも多く設置されていたため、選手は待たされることなかった。海外の国際大会では決勝種目が重なるスケジュールの検査では、選手がトイレを待たされるようなハプニングもありこれまで苦労したことがあったが、今回はスムーズであった。日本記録に対する検査も含めて、延べ 17 名に対してドーピング検査が行われた。

【まとめ】

東京 2020 オリンピックは様々な点で特殊な大会であった。これまでにいくつかの国際大会に帯同しサポートを行ってきたが、この上ないサポートの難しい大会であった。しかしながら、医事委員会、強化委員長、監督・コーチ、事務局の皆様のご協力で、ドクターとして大会や合宿での選手をチェックする機会を多くいただいた点や、数年かけてコンディションチェックの準備を行ったことなどは、良い方向に結びついた。特に、常友トレーナーと宮澤トレーナーは常に選手の身近で状態を確認し、ドクターと連携をとることにご尽力いただいた。的確な判断ときめ細やかなケアもあり、選手への強い味方となっていた。様々なイレギュラーが多い中、「選手を試合のスタートに立てるようにサポートする」という基本的な目標は何とか達成できたのではないかと思われる。もちろん選手の中には満足できない結果に終わった選手やギリギリまでスポーツ傷害に悩まされた選手もいる。今後とも、多くの選手が満足してパフォーマンスを発揮し、充実した活動ができる様、多くの方のご協力のもと選手をサポートしていきたい。